

主題：「介護福祉教育に求められる生活に対するアプローチについて」**―副題：効果的な利用者理解の実現に向けて―**

○ 鴻池生活科学専門学校 氏名 多田 千治 (会員番号 2840)

キーワード：生活、生活歴、信頼関係

1. 研究目的

近年、わが国においては、介護・福祉ニーズの多様化・高度化をふまえ、人材の確保・資質の向上を図ることが課題とされ、2009年4月から、新しい養成カリキュラムに基づく教育がスタートし、介護の専門技術を学ぶ「介護」に加え、教養や倫理を養う「人間と社会」や介護に関わる知識を学ぶ「こころとからだのしくみ」の3領域となり、2011年(平成23年)からは、医療的ケア(客痰吸引と経管栄養)が加えられ、介護福祉士養成施設の教育カリキュラムとして50時間の追加決定も行われ、4領域での合計が1850時間の教育時間となっている。医療的ケアの登場は、介護福祉士の役割のさらなる拡大の1つである。

私自身は、現在、介護福祉士養成施設の教員であるが、近年、施設実習において、介護計画やケアマネジメントに取り組む学生の姿を見て、利用者に関する過去・現在・未来の姿を正確に把握できていないと多く感じた。実際、施設で閲覧するケースファイルなどに書かれた事項をすべて真実だと考え、それに関する疑問を持たず、シートを単に埋めることが課題であるという学生も多く存在し、利用者の生活歴に関する質問自体も思い浮かばないという場合もあった。このような言葉から、教員である自分が、生活歴の根本となる生活に対する概念や考え方を学生に正しく伝えているのかどうか疑問を感じたのである。

今回、介護と関連があるいくつかの領域における生活に対する考え方の違いを明らかにし、今後の効果的な利用者理解の方法を考える手がかりとしたい。

2. 研究の視点および方法

- ・介護と関連する分野における生活に関するとらえた方を紹介し、今後の生活に対する理解とその教授方法への示唆を明らかにする。

3. 倫理的配慮

- ・本研究については、日本社会福祉学会研究倫理指針に基づいて行うものとする。
- ・本発表に関する資料に関する引用については、原点主義を徹底するように努める。

4. 研究結果

看護学の分野では、中西純子氏が、看護の分野で日常生活というときには、基本的欲求の充足構造と言う視点から扱われる一方で、看護の機能を問う場合は、保健師助産師看護師法第5条の療養上のお世話に該当するとしている。ここからは、看護学において、「生活」と「日常生活」に関する概念の共有化が図れていない側面があった。<参考文献(3)参照>生活学の分野では、佐々木嘉彦氏が、生活とは多様で複雑なままの概念であり、実践対象は、家庭の日常的な生活であり、「家庭生活を中心とした人間の物質的に、ならびに文

化的生活、さらに、人間が生きて行く上での基本的で普遍的な活動としての居・食・住生活、ならびにその上に成り立つ諸行為、つまり、狭義の生活である」と定義した。<参考文献(2)参照>作業療法の分野では、濱口豊太氏が、個体の行為が、個人レベルから家庭生活での集団へ展開し、行動範囲が広がるとともに社会生活行為へと発展するダイナミクスを理解すべきであるとしている。<参考文献(4)参照>社会学の分野では、森岡清美氏が、「生活とは、生命の維持や更新の過程から、自己実現や生きがいといった高次の人間的諸活動を含む多数で多様な活動や行為の束である」とした。<参考文献(5)参照>

5. 考察

今回の研究を通して、介護が支えるべき「生活」や「日常生活」を構成する要素については、さらなる明確化が必要であることが理解できた。大北秀雄氏は、生活歴の理解の弱さがケアマネジメントの弱点であると提起し、生活歴の分類に関し、好きなものと知っておくとよいものとの2つに区分している。<参考文献(6)参照>私は、その中には、言葉の大きさや速度という珍しい内容も含まれていた。さらに、井上千津子氏は、介護専門職が生活人としてのセンス、不動の生活観を身につける重要性を訴え、生活様式や生活用具に至るまでの科学的理由を重視し、新カリキュラムの導入によって、家政系科目(家政学に関する講義や実習)が削られたことを矛盾の極みだとしている。<参考文献(1)参照>

私自身は、どのような行為を介護における生活支援と考えるかは、援助の内容を決める要素であると考え。援助者である自分の生活も理解せずに、利用者の生活を支えることは、不可能である。その意味では、利用者の生活を過去・現在・未来の三側面で理解する取り組みを示し、それを学生自身の生活や立場に当てはめて考える機会を実習前の講義内で示す必要がある。今の自分と利用者との生活様式や生活内容の間に共通点や違いを発見し、それに基づく援助内容を実践することによって、学生自身が、利用者理解を深め、自分の受けたい援助を自ら実践しようとする意欲を持ち、信頼関係の構築を目指すのである。

これからの介護福祉士は、医療的な知識の必要性も強調されるが、根本である「生活」に対する理解の見直しも行う必要がある。そのことは、介護福祉士による援助の独自性やセンスを生むのである。そのためにも、介護福祉士養成施設においては、カリキュラムにおける各科目の関係や結びつきを再確認する必要があると私は考える。

○参考文献

- (1)井上千津子編「4年制大学における介護福祉教育の社会的意義」『京都女子大学生生活福祉学科紀要4』、2008年
- (2)佐々木嘉彦編「生活科学について」『生活学第一冊』ドメス出版、1975年
- (3)中西純子編「日常生活行動の概念分析」、『愛媛県医療技術大学紀要1』、2004年
- (4)濱口豊太編『社会生活行為学』医学書院、2007年
- (5)森岡清志編『新社会学辞典』有斐閣、2006年
- (6)高齢者の生活歴ホームページ <http://www.presstokey.co.jp/?p=2140>